

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

センター通信

第 4 号
2010. 3. 31

慶養寺散策記―江戸川乱歩「もくづ塚」の周辺

渡 辺 憲 司

『藻屑物語』所縁の浅草、今戸の慶養寺を訪れた。

寺は、待乳山の麓から、隅田川が、今は暗渠になった山谷堀へでる、そのすぐ脇で、通称江戸通りのバス道に面した所にある。門には「慶養禅寺」とある。

以前、浅草の元鳥越にあり、貞享年間、東今戸、又、本所に移り、さらにこの地が変わったのだそ。うだ。

ここに書くかと思つたのは、一つには、『藻屑物語』に少し興味を持っていたからであり、一つには、東京の掃苔記録者中、もっとも注目すべき人物である磯ヶ谷紫江に、『谷素外墓碑と慶養寺江湖院墓域』（昭和十五年五月発行）なる一書があり、限定百部の内の第二号が手に入つて嬉しくなつたからである。

そして又、江戸川乱歩が、昭和十一年九月号の『文藝春秋』に、小品随筆『もくづ塚』を発表しているからである。乱歩は、この作品に対して「小説の創作に比べて、文献渉猟の作品などはひどく値打ちのないものに見られているが、あの随筆

は売文的駄小説の十編ぐらいに匹敵するものと自分では考えている。」と述べている。

『藻屑物語』は、江戸時代の初期の文学を嚙つたものには、馴染みのある作品ではあるが、それほど有名な作品でもないで、ざつと触れておく。

写本一冊。作者は未詳。文学史的には、仮名草子という分類にならう。

將軍後見役の桜川侍従（佐倉の城主堀田正盛とも）の家の伊丹右京という美少年に、同輩の舟川采女が思いを寄せた。殿様の小姓に思いを寄せるのであるから、右京も大胆である。ここにまず殿様と右京と采女の間三角関係。そして、采女は、念者志賀左馬之助の仲継ぎを得て右京と契ることになる。念者とは、兄分といつてもよく、志賀左馬之助は、どんなことでも若衆、つまり右京の云うことを聞いてやらねばならない。もちろん二人の間は男色の関係にあるのだから、

ここにも、左馬之助と右京と采女の間にも三角関係が生じる。さらに複雑なこと

― 目 次 ―

〈エッセイ〉

慶養寺散策記

― 江戸川乱歩「もくづ塚」の周辺

渡 辺 憲 司

〈研究ノート〉

「大乱歩展」を終えて

鎌 田 邦 義

〈資料紹介〉

「試験騒ぎ」

落 合 教 幸

に、そこに新参者の細野主膳が登場し、右京に対して思いを寄せる。これは、念者の承知しない横恋慕というようなものだが、ともかくも、ここでも、主膳と右京と采女の間三角関係が生じる。

まずは、男色、三角関係三重奏といった物語なのである。

そして、結末は。主膳はしつこく右京に迫るのだが、もちろん、右京は頑として聞き入れない。逆恨みをした主膳は、右京殺害を企てる。だがその計画は、事前に発覚。右京は、主膳を殺害する。

その科により、右京は浅草慶養寺で切腹と決まる（これには背後に殿様の意向もあつたに違いない）。これで終われば、采女は殿様の手の内でメデタシ、メデタシ（めでたくながら）となるのだが、その場に采女も駆け付け、二人は共に切腹して果てるという少年純愛物語である。

寛永十七年（一六四〇）に実際に起きた刃傷事件がもとになっているという。

天和二年（一六八二）成立の江戸の地誌、戸田茂睡の地誌『紫の一本』巻三に、こ

の事件と寺のことが記載されているから、この頃までに成立したことは確かである。

『紫の一本』には、「そもそも慶陽寺と云ふは、もと浅草西福寺の近所にあり。伊丹右京腹を切りしは、浅草にてのことなり。」とあつて、右京と采女の辞世の歌が記されている。

「慶陽寺」には、ルビが「きやうやうじ」とある。小学館本『日本古典文学全集 近世随想集』所収（天理図書館、和学講談所本の『紫の一本』の記載である）。

『藻屑物語』（『雨夜物語』の異本とも）がもとになって、貞享四年（一六八七）刊の井原西鶴『男色大鑑』巻三中の「葉はきかぬ房枕」が作られ、天和三年刊の山本八左衛門『風流嵯峨紅葉』も本書に依拠したものだし、さらに、元禄十一年（一六九八）刊『男色義理物語』にも影響を与えている。これらの文学史的な研究状況については、ここで述べる趣意からはずれるので、野間光辰の「西鶴五つの方法」（『西鶴新新放』昭和五十六年）や、この事件について触れたもっとも新しい論文であり、時代背景に迫る秀抜なる論考、林達也氏の『雨夜物語』に見る男と男の関係性の位相」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇五年八月号）を参照していただくことにする。

さて、乱歩と『藻屑物語』及び慶養寺についてである。

『藻屑物語』を読んだ乱歩は、次のように、「もくづ塚」について記している。「このようにして僕はだんだん采女右京

の恋物語に心を引かれて行き、それに誘われて、浅草今戸の禪寺靈龜山慶養寺というものに興味を持ち始めた。慶養寺は南畝の文中にもある通り、浅草鳥越の里から蔵前に、蔵前から本所押上に、押上から今戸にと転々として、天明の昔すら、もうおくつきの跡もなかったというのだから、今訪ねてみたところで、別段の意味もないとは思ふものの、「紫の一本」の作者の哀傷や蜀山人の懐古の情のゆかしさにとともに、近い所なのだから、散歩のついでにその禪寺を探してみようと思いついた。」と記し、「明治二十八年現住職の先代第三十三世浅野良応という人が私版として出版した『毛久津物語』というものが、たった二部同寺に残っていて、僕はその一冊を乞い受けることができたのであった。」と記している。その『毛久津物語』は、今、立教大学図書館の所蔵である。

『毛久津物語』は、枳形本一冊。四十八頁。活字本・和綴。明治二十九年一月発行。編纂者、慶養寺住職、浅野良應。「岩つ、じ文庫」と蔵書印がある。「岩つ、じ文庫」は、乱歩が岩田準一と一緒に集めた男色関係の蔵書に押されたもの。序文は、大槻如電。如電は、大槻盤溪の次男、言語学者の大槻文彦の兄。『大言海』は、文彦没後、如電が引継、昭和七年に完成しているが、如電が没したのは、昭和六年。如電の著、「江戸服飾史談」は、私にとって必掲の書。明治期のディレクタントイズムを語るに欠かせない人物である。序文には、『藻屑物語』の伝本のことや、関心

を持った関根只誠のことにも触れている。

表紙の裏に、乱歩の識語があり、「昭和九年四月廿三日慶養寺を訪れ、三十四世の住職浅野氏より僅かに残り居りしこの冊子を譲り受けたり。この書の出づる頃建てられし「もくづ塚」大震災に倒れたるをそのま、本堂建築隣りの空地に横たへたるをみる。一封を包み両人の供養を頼み帰る。」とある。

乱歩は、住職浅野良應氏の案内で、「元の本堂の焼跡、土台石だけが残っている裏手の空地へ入って行った。「もくづ塚」はと尋ねると、これですという。本堂の土台石に並べて、多くの無縁の墓石が何かの死骸のように転がっている。その中に、幅二尺丈三尺ほどの自然石が、土に汚れ、雑草に蔽われて、無惨に横たわり、その表面には、五寸角ほどの変体仮名で「毛久津塚」と鑿のあと深く刻まれていた。」と記し、塚の前で一首の歌でも手向けたらどれほど心ゆくことであろうと感慨を述べ、さらにその後も、ひそかにこの塚を三四度も訪れ、「二少年の塚は、何か物忘れでもした表情で、寂然と横たわっていた。」（『もくづ塚』）とも書いている。

『谷素外墓碑と慶養寺江湖院墓域』は、昭和十五年五日発行。発行所は、東京市代々木山谷町（現代々木三丁目）四三〇番地、後苑荘。編者兼発行者である磯ヶ谷紫江と同じ住所である。三十ページほどの縦長の唐本仕立てで、なかなか凝った和装本である。私が豊橋の古本屋から買った時は、一万円。

磯ヶ谷紫江は、明治一八年（一八八五）生まれ、亡くなったのは、昭和三十六年（一九六一）。本名、磯ヶ谷亮一。税金未納者などから、税金を取り立てる民事執行を補助する、裁判所の執行官として勤めながら、掃苔家又風俗史家、美食研究者としても知られた人物。その著作は、私の知るだけでも七十有余。その多くは、私家版。早くは、『花咲く街へ』を明治四十四年に刊行、大正十三年から昭和十年まで、『墓碑史蹟研究』を自費出版。戦後も謄写版で、一九四八年には、『浅草界限風物』等を紫香会から刊行、又『蘆花忌句集』（昭和二十四年・孔版・限定五十部）等数種の句集も出している。

『東京都名家墓所総覧 台東区浅草之部』は、昭和三十五年十二月十日のもの。戦後の各寺の改葬墓などにも触れ、簡単なコメントを付したものが、これがおそらく、紫江最後の作品。昭和三十三年正月三日、限定二十部、ガリ版刷りで発行した、『遊女玉菊古墳考』も労作、血気迫るが如き趣味人の執念のようなものを感じる一冊である。

「お煮縮もお酒お肴餅もない雑炊だけの元旦のあさ・よい年を迎へなさいと書いて来た友へはなんと返事出さうか」（斉藤夜居『続愛書家の散歩』出版ニュー・ス社・一九八四年）で紹介などといった新年の歌を残したのも、代々木から松戸に転居した後、戦後ことである。

戦後の粗末な孔版に比して、戦前のものは、実に雅趣に富んだものである。『紫

苑荘雑録』は、鳥の子の枳形本。「北斎追善法要」「目黒五百羅漢寺開基松雲禪師追善供養のつどひ」などには、紫江が中心となり、掃苔同人が主催した紫香会の案内の回状が収載されている。当時の趣味人が一堂に会しているもの。末尾に、昭和十六年から十九年までの各年度ごとの芸能人・文人達の動向や、家族間のことなど、身の回りの主要な事が記されている。そして身に襲い来る戦争の足音が短く記されている。例えば、「十九年七月たばこバラ売り 十月 日曜出勤」とあり、最後の十二月には、「除夜の鐘聴こえず空襲」と短く記す。

（大通の趣味人）と評されていた磯ヶ谷紫江と戦争が、この二冊の本でも浮き上がってくる。

都立中央図書館には、彼が旅先で集めたマツチや旅館の案内書など、料理屋のパンフレットなどを集めた、『磯ヶ谷紫江旧蔵品貼込帖』が数冊存する。これも、大正大衆文化ロマン残滓帖ともいえるきもの。いずれの機会にか触れてみたいものだ。

『谷素外墓碑と慶養寺江湖院墓域』には、「今日（昭和十四年二月十二日）寺僧は、先年江戸川乱歩氏が親しく「もくづ塚」について調べて行かれたとお話をうけ給はり、建碑については、当時の浅草区役所の吏員平井某が肝煎であつたとのことである。」と記す。紫江の記述は、乱歩訪問の五年後ということになる。

「もくづ塚」の記載は、先に述べた乱

歩のものより詳しい。乱歩は、大きさを、「幅二尺丈三尺ほど」と記しているが、紫江は、「碑の高さ三尺六寸五分、上幅一尺五分、中幅一尺四寸、下幅一尺九寸二分、碑は震災で、大分破損されてゐる、表面にもくづ塚」とあると記している。さらに、乱歩が触れていない裏面に、「寛永のむかし此寺いまだ浅草の大藏前にありける時 陸奥□権につかえたる青年の中にあむことなき事い□きて刃にふしたるを藻屑物語と書つて此寺に蔵せり 今其墓所さだかならさ□□ 當山三十三世のぬし浅野良應発起となり 有志の浄財を募りこれにおれの寶を併せて 明治卅六といふとしの七月此石しるし建ぬ

破損のため六字不明 劍居士
舟川采女 十八歳
伊丹石京 十六歳
不明 七年四月十九日死と刻してある。」と記す。

不明の部分は、先に述べた浅野良應編『毛久津物語』の「募縁之文」と題した一文中に、「日牌回向簿に左の如く記載」とし、「断証院智光靈劍居士」「花童院劍切利空居士」とあり、立教本には、この部分に傍線し書き入れ、「日牌回向簿は大震災にて消失せり」と注記がある。

戒名に「劍」の文字が入ることは、先日、浄閑寺の戒名を調べた時に、心中によって亡くなった者への記載であることを知った。これもその例である。又、「今住職が小僧の折には必ず朝のお勤めには最

後に、兩人の戒名を唱へたもので、暗記しておつたものだと云ひ、あながち伝説でもなからうとの話もあつた。」と記している。

ここで今の住職とあるのが、三十四世浅野良喚氏、良喚氏の弟が、谷中の永久寺に養子となつた平塚良明氏であり、良明氏の息が、平塚良宣氏である。平塚良宣氏の著書『日本における男色の研究』（平成六年五月刊 人間の科学社）に、「もくづ塚」の写真が掲載されている。寺からは、良宣氏から託されたものと掲載された元写真を見せていただいた。パスポート版程の小さなものであつたが、碑は、紫江が、上中下の幅を記してある如く、横広がりのものであり、乱歩が記すように、雑草に蔽われていた。

写真が何時撮られたものかを知りたいと思ひ、永久寺に問い合わせてみたら、良宣氏は、『日本における男色の研究』の原稿は早くから出来ていたものの、写真は、本に掲載するために積極的に各所のものを集めたと云うことである。その通りであるとするれば、この写真は、昭和末年頃のものになるであろう。戦災により「もくづ塚」も廃虚となつてしまつたといつた云い方も出来ないことになる。もしかしらば、塚は草に埋もれて慶養寺のどこかにあるのかも知れない。残念なことに、僧職の傍ら長く教員を務め谷中の生き字引などと呼ばれていた浅野良宣氏が八十六歳で、亡くなつたのは、平成八年六月である。もう少しこの調査に

早く気がつけば違つたことが書けたかも知れない。

乱歩が、『もくづ塚』を書き始めた切っ掛けは、イギリスの哲学者、エドワード・カーペンターの『原始民俗における中性者』の一冊に「日本のサムライとその理想」という一章があり、「カーペンターと地球を半周して、日本人の僕がやつと『藻屑物語』の本文を読んだという逆様ごと」であると記している。そして、カーペンターが、「日本の武士道日本人の軍の強さと、古代ギリシャのドーリア民族の軍の強さとの相似について語り、その秘密は共にギリシャ的男性愛にあることを」説いていると説明し、「この考えは現在のわれわれには何となくおかしく聞えるのだけれど、遙かなる第三者が、時的的真中近くを射当てるといふこともないのではない。」と記している。

乱歩は、日本軍の強さの背景に男色愛があると考へていたのであろうか。軍の強さを、『藻屑物語』から感得したのであろうか。滝沢馬琴が言うように、「石京・采女は共に不忠、不孝至極の人也」なのである。男色、三角関係三重奏の物語なのである。おそらく乱歩は、この物語の持つ摩訶不思議な魅力を、慶養寺を訪れることで感じていつたのである。日本軍を支える強さ？が、不忠・不孝の物語を紡ぎ出したものであることを感じたのである。それは、権力に背を向ける男色文学の美学といつてもいいものなのだ。

ない直線や曲線が描かれている。近所の子供達のいたずらであろう。子供達にはこの塚は落書きにふさわしい一塊の石ころに過ぎなかつた。大人達にさえも、それはもう一塊の石ころに過ぎなかつた。」と記しながら擲筆した。

昭和十一年。軍靴は足音を高めていた。乱歩の作品が大きな曲がり角にあつたのもこの時期である。

「一塊の石ころ」となつた「もくづ塚」に寄せた思いを解釈することは難しい。ただ、この後、乱歩が男色文献の収集に本格的に乗り出したことは事実である。趣味の世界に引き籠もつていつたと言つてもいい。

慶養寺の門を出る頃、冷たい雨が降り出した。後ろから、「つまらぬ男色を……」と、誰かに声をかけられたような気がして振り返ると、庭に大きな牡丹の花が咲いていた。